平成30年度資源評価報告書（ダイジェスト版）

標準和名 マアナゴ

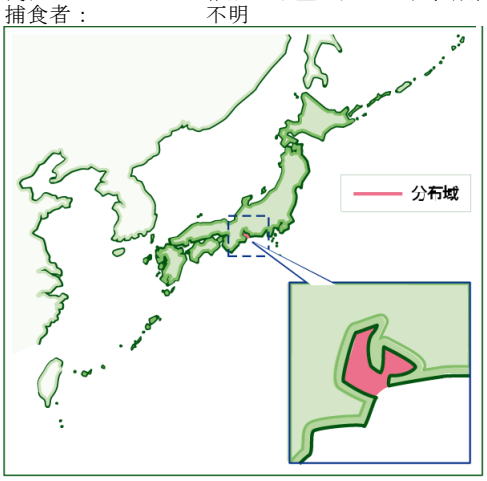
学名　*Conger myriaster*

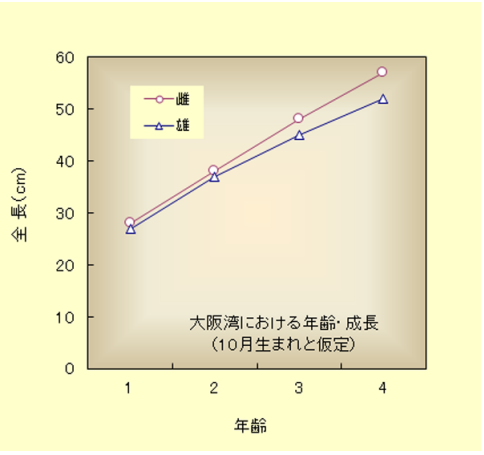
系群名　伊勢・三河湾

担当水研 中央水産研究所

生物学的特性

寿命：　4歳以上
成熟開始年齢：　不明（雌雄とも成熟個体が見つかっていない）
産卵期・産卵場：　産卵期・産卵場の詳細は不明、産卵場は沖ノ鳥島南方の九州パラオ海嶺付近に唯一確認されている
食性：　稚魚は小型の底生生物、成長につれエビ類、魚類、軟体類
捕食者：　不明



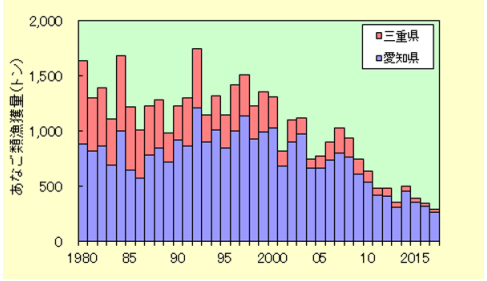


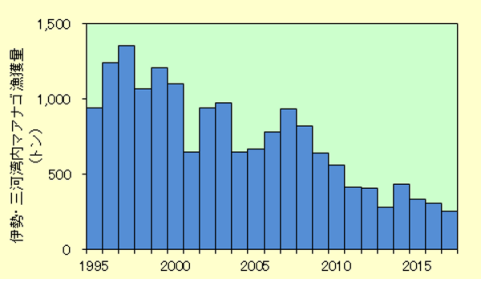
漁業の特徴

伊勢・三河湾では、小型底びき網漁業（小底）、かご漁業による漁獲が主である。小底の漁場は、伊勢湾湾奥部と湾口部を中心に、かご漁業の漁場は、沿岸に沿って広く形成される。また、本種の仔魚であるレプトケファルス（のれそれ）は、混獲物として水揚げされていたが、2016年以降はイカナゴの全面禁漁により「のれそれ」の混獲がない。

漁獲の動向

あなご類の漁獲量は、1980～2000年は概ね、愛知県で600～1,000トン、三重県で300～600トンで推移していたが、その後は減少傾向にある。評価対象である伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量（「あなご類」の漁獲量から外海側の漁獲量を差し引いたもの）は、1995～2000年までは概ね1,000トン以上で推移していたが、2011年以降は500トンを割り込み、2017年は249トンであった。



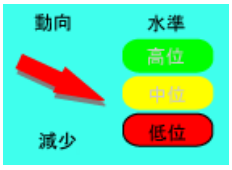


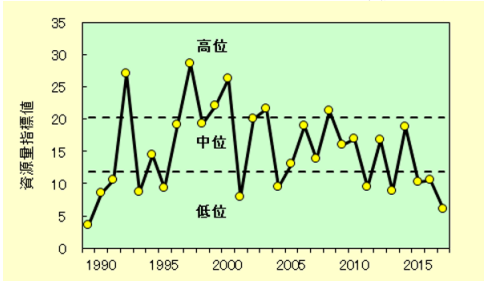
資源評価法

伊勢・三河湾のマアナゴ漁獲で70％以上を占める愛知県における主要水揚げ港を根拠地とする小型底びき網漁船によるマアナゴの単位漁獲努力量あたり漁獲量（CPUE）を資源量指標値とし、資源状態を判断した。その他、愛知県・三重県の生物情報収集調査、標本船調査、漁場一斉調査ならびに新規加入量調査の結果も判断材料とした。

資源状態

資源量指標値および標本船調査から算出した資源量指数は大きく変動しながら推移している。過去29年間（1989～2017年）の資源量指標値の最大値と最小値間を3等分して上から高位、中位、低位とした。2017年の資源量指標値は6.0となり水準は低位、動向は直近5年間（2013～2017年）の資源量指標値の推移から減少と判断した。





管理方策

資源水準及び資源量指標値の変動傾向に合わせて漁獲を行うことを管理目標として、2019年ABCを算定した。湾外から来遊した個体は湾内で成長し1～2歳で漁獲対象となることから、小型個体を保護し、加入量あたり漁獲量の増加を目標とすれば管理効果が期待できる。そのため、秋冬漁期の小型魚の保護、再放流は成長管理として有効である。

管理基準	Target／Limit	2019年ABC（トン）	漁獲割合（%）	F値（現状のF値からの増減%）
0.7・Cave3-yr・0.76	Target	126	－	－
	Limit	157	－	－

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABCtarget＝ABClimit・αとし、αには標準値0.8を用いた
- ABC算定規則2-1)により、ABClimit＝δ_1・Ct・γ_1で計算した
- δ_1には0.7（低位水準における推奨値）、γ_1(0.76)は、γ_1＝1＋k(b/I)で計算した。kは標準値の1.0、b(-2.16)とI(8.92)は資源量指標値の傾きと平均値（2015～2017年）
- CtはCave3-yr（2015～2017年の平均漁獲量）

資源評価のまとめ

- 水準は低位、動向は減少

管理方策のまとめ

- 資源水準及び資源量指標値の変動傾向に合わせて漁獲を行うことを管理目標として、2019年ABCを算定した
- 資源量増加には秋冬漁期の小型魚の保護や再放流が有効である

執筆者：横内一樹・黒木洋明

資源評価は毎年更新されます。